

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2020年5月1日

文責：JUN

子どもの命と学びを守るために

1. つなかりを壊さないためにつなかりを止める自覚を

人類の生存を守り、その生存を支える人と人とのつなかりを守るために、あえて、つなかりを止めなければならない、つなげれない辛さに耐えなければならない、私たちは、今、一人ひとりがそう自覚しなければならないのではないのでしょうか。

人類はつなかりがなければ生存できません。同じ時代を生きている人たちとつなかり、時代を超えてつながる、そのつなかりによって悠久の時代を生きてきたのだしこれからも生きていきます。しかし、ウイルスはつなげればつながるだけ、かかわればかかわるだけ、多くの人を蝕んでいきます。人々は、その恐怖によってつなかりを止めなければならなくなりました。

他国との往来を止め、休校、休業、外出制限を実施し、人々が集まって行う会議もイベントもスポーツも中止し、とにかく「家にいる」ことを徹底する、つまり、人とかかわることを止める、そうしなければ、強い感染力を持ち、感染すれば万一の場合人命にかかわるといふ恐ろしいウイルスの勢いを削ぐことはできないからです。

ところが、そうなってみて、人とかかわれないつなげれないことがどれほど辛いことか、人々は、身にしみて感じたのではないのでしょうか。孤独感でどんどん気分がブルーになっている人、気力をなくしている人が増えています。もちろんコロナウイルスが迫っている得体のしれない恐ろしさはだれの心をも重くしています。

なかには、自暴自棄に陥ってしまった人もいます。最も憂慮すべきは、ウイルス怖さからの排斥行為や差別事象が生まれ、暴力的行為も引き起こしていることです。医療従事者に対する排斥まで起きているというニュースには、憤りを感じます。もちろんそのような行為を赦すことはできません。けれども、そのような行為に走ってしまう人に存在する不安感、恐ろしさはだれにでもあるものです。酷い行為に及んだ人は、恐ろしさと闘うためにつなかりを止めなければいけないという判断よりも前に、ウイルスによってつなかりを大切にする心が壊されてしまったのです。

つなかりが壊されてしまえば、それは人類の敗北です。冒頭で述べたように、つなかりが人類の繁栄を築いてきたのですから。

いま、必要なのは、「つなかりを壊さないために、つなかりを止める」という、哲学的ではあるけれどだれにでもわかる、細やかで丁寧な、それでいて現在わかっている科学的根拠に基づいた明確な説得・説諭なのだと思います。人々の多くは、納得できれば、かなり耐えることができます。何が大切なので、今、どうしなければいけないかが見えるからです。そうではなく、今、ど

うしなければいけないかだけを要求されると、人は息苦しさで耐えられなくなるのです。

そのことは、学校教育に関しても言えます。以下、学校に限定して述べてみることにします。

2. すべての子どもの命と学びに、見通しを持って

① 休校期間に子どもの学びにどう対応するか

大型連休に入った今は、緊急事態宣言発令中です。宣言発令から3週間が経過してようやく感染者増に鈍化傾向がみられるようになりました。自粛生活に努めた成果が少しは出てきたのでしょうか。ただ、連休の本番はこれから、そこへこの微小な改善状況、それが気の緩みになったら元の木阿弥になる、テレビはしきりにそう警告しています。こうした状況からして、6日までと設定されていた宣言はきっと解除されないでそのまま延長されることなのでしょう、むしろ、コロナウイルスとの闘いは今が正念場なのだと考えて。

教師たちは、なんとも複雑な思いになっているにちがいません。今がどれほどの非常事態なのかはわかっています。子どもたちの命が何よりも大切、大勢が集まる学校のリスクを考えた子どもたちは登校させられない、仕方がない、そう納得しているのです。けれども、教師のからだには子どもたちとかかわる感覚がしみ込んでいるのです。だから、子どもたちがこない学校が虚しくなっているのです。「授業をすることに飢えている」と私に言った人もいました。

その子どもの来ない休校がさらに延長されるという報道が、ここにきて相次いで出てきました。その期間は5月末日まで。子どもたちは、もう1か月、学校に戻ってこないことになるのです。教師たちはため息をつきながら言っているのでしょう、「予想していたけど、やっぱり！」と。

さあ、また1か月、子どもたちの来ない日々を迎えることになります。

もちろん、その間、子どもたちとの連絡をまったくしないということはありません。家庭でできる学習教材をなんらかの方法で届けなければならないし、「どうしてる？」と電話をしてみることもあるでしょう。それをこれまでと同じようにできる範囲で実施することになるでしょう。

そんななか、ここ半月ほどで急速に話題になってきているのが、オンラインでの教師と子どものやりとりによる学習です。「情報端末を活用した学習」とも言われています。人とのつながりを止められている今は直接会うことはできません。そこで、人と人をつなぐツールが必要になり、それが郵便とか電話とか配達とかになり、今、もっとも速く、もっとも簡便なネットを活用するようになってきたということなのです。

一言で「オンライン授業」と言っても、やり方はいろいろあるようです。多くは、学習課題を子どもに伝える動画を学校から発信し、各家庭の生徒がそれを受け取って学習するという一方向性のものなのでしょう。それに対して、受信する生徒が同じ時間に何人も各家庭でスタンバイし、発信する教師と子どもたちがやりとりをしながら進める双方向性のものもあります。最近テレビでよく目にするようになった「オンライン会議」の授業版です。

ある市では、市のすべての学校で、家庭と学校をオンラインでつないだ「デジタル授業」と称する取組を始めるようです。家庭にいる子どもたちは、スマートフォンあるいはパソコンで学校からの発信を受け取ることになります。たぶん、そういう環境にない子どもには、タブレットを

学校から貸し出してどの子どもも受信できるようにするのでしょう。

このような「オンライン授業」は、ヨーロッパではすでに行われていました。ですから、今のコロナウイルス緊急事態において、それらの国々では、休校になるとすぐ開始されたようです。日本でも、遅ればせながら各地で実施され始めたということなのです。

休校しなければならない現在の状況において、直接会わなくても受信・発信のできるこの方法は、それまでの方策と比べて格段に便利で有効なものでした。ですから、先に紹介したような市のように、全国各地で実施され始めたし、行政側も計画されていたタブレット配備を前倒しする検討をしているようです。

ただ、他の方法と比べて有効であるとは言っても、そこにはさまざまな難しさとか問題とかがあるようです。そのことを承知しないで過信してしまうと、これらの方法はもの珍しさだけの一時的な流行に留まってしまうでしょう。

そういう意味で、以下、現在のところ出てきている問題点を列記してみることになります。

- ・ コンピュータを立ち上げてどう授業に参加するかは家庭裁量に委ねるしかないので、家庭の状況とか親の態度によって差が生じる。また、わからなくなったり困ったりしたとき、子どもが頼るのは保護者だが、どの保護者も同じように子どもの状況に対応できるわけがなく、保護者によって子どもの学力に差が生まれてしまう。
- ・ 学校が提供する学習教材は、学級ごとにはなく学年として作成したものになるだろうし、市として取り組んでいるところでは、各学校の教師が共同で作成したものを一律に使用することになるのではないだろうか。場合によっては外部で作成されたものを使うことになるのかもしれない。どちらにしても、教材提供が、それぞれの学級に適合しない一律のものになったり、送付・送信するだけで子どもの疑問、質問に対応できなくなったりすると、学習に不安のある子どもは途中で脱落してしまう可能性がある。
- ・ 動画を配信するだけではない双方向性のある「オンライン授業」においては、教師と生徒のやりとりができるし、子ども同士のやりとりもできるから、これは画期的なこととかなり有効である。ただ、同じ時間に各家庭で一斉にスタンバイする状態にできるかどうかは、生徒の主体的な意識があるかどうかにかかっている。そういう意味で小学校の下学年の子どもには無理だろうし、高学年や中学生であっても、どの子どもも参加できる状態にできるかどうかは難しい問題である。
- ・ 「オンライン授業」だと、グループによる学び合いもできそうである。いつも教室で行っている4人グループも組めるものと思われる。ただ、一人ひとは各家庭にいて同じ場所にいないわけなので、グループ同士の微妙なかかわりはつくれないし、教師のそれぞれのグループへの支援には限界があると思われる。そこはバーチャルの限界である。

画期的だと思われる「オンライン授業」にもこういった難しさ・問題があります。けれども、現在の大変な状況の中、どういうことをすればよいのか、どうすれば子どもたちにとってよいのか、それを常に考え、そのために教師たちは動いています。教師たちのそうした思いは、きっと子どもたちに届いていくでしょう。

ただし、こうして一生懸命な努力をする教師たちがため息のように言った言葉が印象的でした。それは、「どれだけ工夫しても、どれだけ手立てを講じても、学校で行う授業のようにはいかない」ということでした。ここに、「デジタル授業」「オンライン授業」の限界があるのですが、実は、

このことは、これから突入する教育のICT化の問題とつながることなのです。

② 教育のICT化への警鐘

私は、昨年度一年間、『学校教育・実践ライブラリ』という教育誌に「学び手を育てる対話力」という連載を執筆していました。そのVol. 11 に人工知能（AI）による学びについて、Vol. 12 にはICTによる学びについて、次のような危惧が存在すると述べました。

- ・ 知識を獲得し理解を深めようとするとき、必ず「わからなさ」にぶつかります。その「わからなさ」に向かって思考する過程が学びを深めるのですが、AIはその過程に寄り添ってくれるのでしょうか。効率を優先し、先へ先へと誘導される学び方になったとき、そこで得た知識・理解は生きたものにはなりません。苦勞せず得たものほど危ういものはないのです。
- ・ 知識獲得にも子ども独特の発想があり子どもによる発見もあります。わかる・できるに特化したAIによる学びでそれはどうなるのでしょうか。人間の発想を受け止め、ともに思考するAIは実現可能なのでしょうか。
- ・ 他者の思考とつなげ、他者の考えと切磋琢磨したり、自分にはない考え方から学んだりすることで学びは深くなるのですが、AI相手の学びがそういう他者関係を必要としないのだとしたら、学びが痩せたものになるのではないのでしょうか。他者と協働しない個人的なものになることで、本質的な学び、人間的な学びが消えてしまうのではないのでしょうか。
- ・ 探究的・対話的学びで子どもたちに目指させたいのはICTから得るデータから探し当てることではありません。探し当てたものをもとに、データそのままではない、子どもにとって未知の何かを発見する、もっと言えばつくりだす、そういう学びをさせたいのです。
- ・ 機器からは文字として音声として言葉が発信されているでしょう。しかしそれは、生きた人との対話ではありません。そこに、わからなさに寄り添い、ともに考え、何かを探究する喜びを共有する関係性はなく、その言葉に人間的なぬくもりが感じられないでしょう。
- ・ ICTの便利さ、わかりやすさに溺れ、思考・探究することが痩せていったとき、子どもたちの学びは深まらず、人間らしさや人としての可能性も実現できなくなっていくます。

以上のことは、これから加速化するであろう「教育のICT化」への一つの警鐘として受け止めていただけたらうれしいです。子どもの学びにとってよりよいICT化にするために。

それはそれとして、現在のコロナウイルス対策下での「情報端末を活用した学習」は、特殊状況での一つの策として行われていることなのでそれはそれで意味のないことではありません。何の手立ても講じないで、ただ休校にしていればよいということではないのだし、何よりも、今は、子ども同士のつながりが止められているのですから、子どもの学びを守る一つの方法としての意味は感じます。けれども、機器による方法は、所詮、機器によるものでしかなく、生身の人間のかかわりを超えることはできないのです。実際に教師が学校で行っている授業のような学力の個人差を埋める対応までできないのです。教師との応答、子ども同士の学び合いのない、渡された教材を手一人で行う勉強には限界があるのです。もともと機器を相手に孤独に学習するという学び方は理想ではないのですから。

そういうことから、「オンライン授業」「デジタル授業」を実施したからと言って、それだけで休校中の子どもに対応できているなどという安易な考えに陥ってはならないということははっきりしています。あくまでも今できるいくつかの方策ではベターだと思われる一つの方法でしかないのです。

ところで、「オンライン授業」について検討し、この「たより」を記述するうちに、おまけのように気づいたことがあります。それは、学校が再開されたとき、タブレットを使えば教室においてグループの学び合いができるということです。ICTを活用した学び合いについてはこの「たより」の3月号に書いたような知識はあったのですが、グループでのやりとりもオンラインでできるというところまでの理解が私にはありませんでした。それが可能だったのです。緊急事態になって以来、グループの学び合いができないということが残念でたまらなく、この状態がいつまで続くのかという思いにかられていただけに、気づいたとき思わず笑みがこぼれました。これなら接近して向かい合わなくても、それぞれの考えの交流はタブレットを通じてつくれます。ただしそれには、1人1台タブレット整備と子どものタブレット操作技能が必要ですが。

③ 再開をすべての子どもにとって平等に

方法に違いはあれ、印刷物による家庭学習を作成してそれを子どもたちのところに届けに行ったり、オンライン的な取組を始めたりして、教師たちは頑張っています。けれども、そうした努力にもかかわらず十分に学べない子どもがいるのも事実です。教師たちは、今の方法がベストだとは思わないけれど、そうするしかなく、それを精いっぱいやっているのです。けれども、心配な子どもが何人かいて気になる、そういう思いをいつも抱いているにちがいありません。

学校が再開されたとき、休校期間中にどういう勉強をしてきたかには子どもによってかなりの異なりがあるにちがいありません。にもかかわらず、ある機関が、家庭学習として学習させたりオンライン授業を行ったりすれば、その単元の学習は履修したこととみなしてよいという意味のことを述べたとマスコミが報じましたが、言語道断です。それは、現実を目をつぶり、状況を取りあえず丸く収めるための場当たりの発想です。学校再開とともに、子どもたちはかなりの差を抱えて戻ってくるのです。教師は、その差を少しでも埋める対応に苦慮することになるのです。

学校再開は、すべての子どもにとって平等な再スタートになるべきです。学校教育は、すべての子どもに対して平等に開かれているのです。しかし、今は非常時、理想論だけ言っていたのでは前に進めない、だから、いろいろな不具合はあるけれど、不平等もあるけれど、とりあえず元に戻したほうがよい、そして社会を安定させる、そういう考え方はいかにも正論であるかのように聞こえます。しかし、それはどう考えても民主主義の原理に反しています。何よりも熟慮に熟慮を重ねてやむを得ず出した考えのようでもありません。

今、にわかに、この際、学校を、欧米と同じ9月始まりに変更すればよいのではないかという意見が出てきました。

これから私が述べることは、子ども一人ひとりに向き合う授業づくりを心掛けてきた一人の元教師の、子どもの側に立った純粋な思いです。そうご理解いただいてお読みいただければと思います。

学校現場からすると、ウイルスの情勢に揺さぶられ、一度立てた本年度のカリキュラムは二転三転しています。新しい学習指導要領になって、これまでにない教育が展開されるはずだったのに、それはどこかに行ってしまいました。状況からして仕方のないことだとはわかっています。けれども、5月7日再開に合わせて作成したものが休校延長で組み直しになる、組み直せば直すほど、学習内容を詰め込むだけになる、夏休みをなくすとか短縮するとかいう話も聞こえてきていますが、猛暑の中でどれほどの効果があるのかははっきりしません。そしてそもそも休校期間中の家庭での学習実施状況は量的にも質的にもバラバラ、これではすべての子どもにとって平等なスタートが切れるはずがありません。

こうした状況で学校が再開されれば、まずはバラバラになっている子どもの状況に対応しなければなりません。その際、休校中じゅうぶんな学習ができなかった子どもに配慮することになるでしょう。にもかかわらず3月までに設定されている一年分の学習内容を履修させなければならぬとしたらどうすればよいのでしょうか。もともと2か月新学期開始が遅れていて詰め込まざるを得ない状況なのですから、すべての子どもへの配慮も難しくなるのではないのでしょうか。仮に、休校が6月にまでずれ込んだらそれはもっと難しくなるでしょう。つまり丁寧な教育はできないのです。もちろん新学習指導要領の内容への取組はできる範囲のことだけしかできません。そういうなんとも不十分感のぬぐえない落ち着いた状態での教育活動になるのです。ですから、子どもの立場に立ち、どの子どもにとってもよりよい学びを受けさせたいと思えば思うほど、コロナウイルスで中途半端になった期間についてはすっぱりリセットして、いっそ、9月始まりにして、新学習指導要領の内容も盛り込んですっきり始めたらどんなによいだろうと思うことになるのです。

これは、子どもの教育だけを考えればまさに正論ではないのでしょうか。しかし、4月学校始まりは、日本の社会のシステムの中に組み込まれていることで、学校だけで変更できることではありません。学校をそうするのであれば、世の中全体のあり方もそれなりに変えなければなりません。特に初年度は4～5か月のタイムラグが生まれるので、学校も、子どもたちを受け入れる社会も、それへの対応が必須です。それはきっと、一年間の日本社会のスケジュールとシステムにかかわることだけに多岐にわたるものでしょう。もしそれを実行するとなったらどれだけの変更・組み直しをしなければならないかと考えると、その難しさは想像に難くありません。それほど、万全の準備ができないこんな急な状態でどのように実行するというのか、現実的に考えればそう思います。ですから、多くの人は、悪い考えではないと思いつつ、いきなりの実現は不可能だとして考えから外してしまっているのではないのでしょうか。

しかし、大改革は、大多数の人が無理だと思っていたことが、そのことへの人々の思いが熱い熱量になり、多くの人のエネルギーになったとき生まれる、そういうとき、不可能が可能になる、人類の歴史はそれを示しているのではないのでしょうか。かつて、丁寧に、関係するすべて部所に対して配慮し、議論に議論を重ねているうちに、何も実現できなかったとか、実現したのだけれど妥協の産物でしかなかったということは枚挙にいとまがないのではないのでしょうか。

子どもたちは、未来の社会を背負うことになる国の宝です。その子どもたちのことを第一に考えたとき、教育として不十分にしかできない状況のまま進めるのではなく、子どもにとって良い

方策があるのなら、世の大人たちはその方向での努力をすべきなのではないでしょうか。

もちろん、どんな形であろうとも、再開されれば、教師たちは、抜け落ちた部分をなんとか埋めようと大変な努力をすることは思います。けれども、それにも限界があります。ある市が、夏休みの始まりを1週間ほど遅らせ、2学期の始まりを1週間早めるという方針を示しましたが、そうしたとしても、3月から5月までの3か月分の補充としてはたった2週間しか当てられません。それで精いっぱいなのです。中には、夏休みをなくすという方針を示した自治体もありましたが、子どもにとってそれはかなりつらいことであり、はたして教育の実が上がるかかどうか疑問を感じざるを得ません。数値的な辻褃合わせではだめなのではないでしょうか。どの考えにも、子どもの学びを遅らせてはならないという気持ちがあるのはわかりますが。

結局、どのような方法をとろうとも、どれもこれもみな無理があるのです。けれども、だれも予見できなかった非常事態なのですから、未来の国を背負う子どもたちにとって何がいちばんよいのかを考えて実行することこそ、時代を超えて「つながり合って」きた、その「つながり」の中で生きている大人たちの、次の世代に「つなぐ」務めなのではないでしょうか。

どうか広い視野で眺めて考えてください。3か月も休校になるなどということは70年に及ぶ戦後教育で初めてのことです。そのいわば百年に1回あるかないかの状況に、今の子どもたちが遭遇し巻き込まれたのです。今、生きている大人たちのだれ一人として、子ども時代にこれほどの事態は経験していないのです。私たちは、今の子どもたちだけを、この先不十分になるとわかっていながら歩ませることができるのでしょうか。

一刻の猶予もできない状態です。とりあえずの工夫をし対策を立てて学校再開とするのか、いろいろな調整は必要だけれど9月始まりの実現に舵を切るのか、それとも、もっと別の方策を考え出すのか、その一応の結論が必要です、なるべく早く。

繰り返し言いますが、学校教育はすべての子どもに対して平等に開かれていなければなりません。そもそもの制度設計から差が生じるなどということはおかしなことなのです。子どもたちにとって最も良いかたちの英断を下してほしいと心から願います。

学校を休校にすることは、子どもの命を守るための措置です。そして、その休校が解除され、学校再開となったとき、教師は、当然、第一に子どもの命を守り続ける対応に徹しなければなりません。しかし、そこに二つの難しさがあります。一つは、命を守るとともに、子どもの学びを保障することに努めなければならないということです。命と学び、この二つの両立にかなりの神経とエネルギーを注ぐことになるでしょう。

そして、もう一つの大変さ、それは、教師自身も、自らの命を守らなければならないということです。教師の仕事はかなりのリスクを背負ったものです。子どもの命と学びを守るために何人も子どもとかかわらなければならないからです。もちろん子どもたちは感染者ではありません。けれども、いつだれが感染するかわからないのですから、子どももそうですが、教師もまたリスクを背負った状態です。また、今言われている「3密にならない」も、できる限りの努力と工夫はしていますが厳密には守れない状態で仕事をしなければならず、そのことでも心を砕かなければなりません。こういう教師たちのことをどうかご理解いただきたいと強くつよく思います。

休校が続きます。学校の教師の皆さん、頑張りましょう。